

編集後記

猛暑の最中、なるべく自分の家の電気量を消費しないで熱中症にならないためには、図書館へ行って読書するか、うたた寝するのも一つの方策でしょう。あるいはシニア割引やレディースデイを利用して、映画館で名画鑑賞か昼寝を楽しむのも、手軽な消暑法かもしれません。ところが、最近の作品は短いカットで畳みかけてくるようで小気味いいのですが、あまり感動が湧いてこない気がします。立体映画も見ていて疲れてしまいそうです。

どうしても、古き良き時代の名画が思い浮かんでなりません。年輪を重ねた証でしょうか。邦画にも名作が沢山ありますが、残念ながら、洋画の方がスケールが大きく、セリフもずっとよく練られていて、中でも『駅馬車』は今なお脳裏に焼き付いています。ジョン・フォード監督の西部劇の頂点。これを見ずしてアメリカ映画を語れない、と言う人もいます。いわくありげな乗客を乗せて、アリゾナからニューメキシコまでひた走る駅馬車を舞台に、インディアンの襲撃や無法者との決闘までつめこんだ究極のアクションでした。

いい映画には人それぞれに忘れがたい名場面があって、たったひとりのセリフから思い出のシーンが鮮やかに浮かびあがってくるところに、その面白さがあるのだと思います。みんなで語り合いたい映画もあるけれども、誰にも言わずにそっと自分の胸の中だけにしまっておきたい映画もあるはず。同じように誰もが認める名場面、名セリフもあるけど、誰にも言いたくない、あるいは他人には言えないひそかな“私だけの”名場面、名セリフもあるに違いありません。

『カサブランカ』のなかで、ハンフリー・ボガードがイングリッド・バーグマンに言う「君の瞳に乾杯。」など、往年の映画ファンなら誰でも知っている名セリフでしょう。「ゆうべどこにいたの?」「そんな昔のこと覚えていないね。」「今夜会える?」「そ

んな先のことわからない。」これも『カサブランカ』でした。

ファーストシーンは映画の生命、映画のすべてですが、ラストシーンは本当のしめくりであり、印象深いシーンも少なくありません。『カサブランカ』でいえば、「私たちにはパリの思い出がある。」と言った、夜霧の空港の情景。「私はクレメンティンという名前が好きです。」と、ヘンリー・フォンダがラストできめる『荒野の決闘』。はるかなる山の彼方に去って行くシェーンに向かって、「シェーン、カムバック（帰って）」と叫ぶ少年の声がかたまる『シェーン』も、またひとしお心に残る名セリフでした。

『現ナマ（金）に手を出すな』で、やくざ稼業から引退を考えた初老のジャン・ギャバンがギャングの相棒に手鏡を突き付けて、低い声で言う、“自分たちはもう若くない”という現実を論ずる場面は強烈でした。「その面（ツラ）を見ろ。目の下のシワを見ろ。俺も同じだ。よく考えろ!」こんな映画を見たあの頃は、だれだってシワなんてなかったのだから!

常々、前向き思考といいながら、つい古き良き時代にタイムスリップしてしまいました。何はともあれ、幾歳月を経ようとも、心にシワをつくらないで、おらかな心で、太極拳を愉しむ姿勢が続く限り、人はみないつ迄も青春時代の真っ只中にいられるのではないのでしょうか。

さあ、箱根山の火山活動の影響で一部運休していた箱根ロープウェイが全線運行再開、との朗報も届きました。クーラーに浸ってばかりいないで、いい汗かいて爽やかな秋を迎えましょう。

『浜太極』は、みんなの会報です。日ごろの稽古や行事に参加して気付いたり、感じたこと、その他太極拳以外のことでも、何なりとお気軽に寄稿下さるよう、お待ちしております。
(中島幹夫)